

自然はつながっている

私たちの生活は、自然とどのようにかかわりあっているでしょうか。自然とのつながりを感じ、意識することによって、私たちの心はどのように育っていくのでしょうか。





ごはん、おいしい!

ある日の竹田家の夕食時
です。

「いただきます!」

いつものように元氣よく
食事をはじめた由美さん

(小学五年生)。

「うーん、ご飯、超うま
い!」

と、大きな声で言いました。

いつもなら、まっさきに

おかずに手を伸ばす由美さ
んですが、ご飯ばかりを口
に入れて、一人でうなずい
ています。

「どうしたんだ、いきなり」

そう言いながら、父親の和雄さん(40

歳)が由美さんの顔を見ると、いかにも



おいしそうにご飯をほおぼっています。

和雄さんは妻の京子さん(38歳)と顔を見
合せて、思わず笑ってしまいました。

「由美は今日、学校の授業で稲刈りをし
てきたのよ。だから、ご飯が、いつもよ
りおいしいのよね。でも『うまい』じゃ
なくて、『おいしい』でしょ」

と京子さん。

「そうだった。ご飯、甘みがあつて、
とつてもおいしいね。」

ねえ、お父さん知ってる？ 今日、学校で稲刈りの仕方を教えてくれたおじさんが言っていたの。一本の茎に約百粒のお米ができるんだつて。一つの株に約二十本の茎があるとすると、一つの株には二千粒くらいのお米ができるのよ。すごいでしょう。クラスのみんなも、『へえ！』つて、驚いていたわ」

それを聞いて、思わず「へえー」と声をあげた和雄さんに、京子さんも、由美さんも笑ってしまいました。

京子さんは、由美さんの笑顔を見ながら、今年の五月のことを思い出していました。

田植え体験



由美さんは、学校の総合学習の一環で稲作を行うことになりました。学校近くの休耕田を利用しての授業です。まず五月に田植え体験を行いました。

ところが、由美さんは田植え体験することに気が進みませんでした。虫や蛙がいる泥の中に足を入れて作業をするなんて、想像しただけでも気分が悪くなりそうでした。母親の京子さんに励まされて出かけたものの、やはり直前までおっくうでした。

田植え体験が始まると、由美さんたち

※休耕田：米づくりを一時やめている田んぼ。



は、農家のおじさんから苗なえの植え方を教
わったあと、靴くつを脱いで素足すあしになりました。
太陽あたたに温められた地面あたたのぬくもりが
伝わってきました。また、歩き始めると

地面おうちの凹凸おうちや小石こいしが足
の裏うらに当たって、痛く
て仕方がありませんで
した。

由美ゆみさんたちは、
畦あぜに一列に整列す
ると、苗なえを持って
水田みづいの中に足を入
れました。

「わー、気持ち
悪い！」

「きやー、冷
たいー！」

「怖いよー！」
みんなの歓声かんせいとも悲鳴ひめいともつかない声
ががりました。

泥どろの中に足を入れると十五センチくら
い沈しずみました。由美ゆみさんは転ころばないよう
にするのが精せいいっぱいでした。ぬるぬる
した土つちが指ゆびの間に入り込んできました。
足を動かそうとすると、地面ぢめんに吸すいつい
たようになります。

水田みづいには、農家のおじさんとおばさん
が両端りょうたんを持ったロープが横に張られてい
ます。そのロープには三十センチ間隔かんかくで
印いんがついていて、印いんのところところに苗なえを三本
くらい束たばねて植うえていくのです。みんな
が植うえ終わると、一歩後ろうしろに下がります。
するとロープも移動いどうし、印いんのところ
に、また同じように植うえていきます。



後ろに下がるとき、足を取られてしりもちをつく人もいました。そのたびに笑い声や歓声があがりました。作業は三十分ほどで終わりました。

由美さんはずっと前かがみになっていたので、腰こしが痛くなつてしまいました。ふと隣となりの友だちを見ると、顔に泥をつけています。とても満足そうに笑っています。由美さんも、田植えをやつてみて、とてもよかつたと思いました。

由美さんにとつて、この体験は忘れられないものになりました。最初は、気持ちが悪かつた泥かたしよの感触や水田のにおい、水面を這はう虫やときおり目の前に飛び込んでくる小さな蛙なども、しだいに気にならなくなっていました。



むしろ、足や手先に感じる泥や水、頬ほに当たる風、水面にきらめく太陽の光などが、思いのほか気持ちよくて、クラスの間といつしよにいても、たった一人で自然と向かい合っているような感覚だったので。

家に帰るとすぐ、由美さんは目を輝かがやかせて、京子さんに、田植え体験の話をしたのでした。

京子さんは、あれほど嫌いやがつっていた由美さんのことを思い出しながら、直接じかに肌で感じることは、知的に理解することよりもずっと心に影響を与えているのだと思いました。

「勤労感謝の日」とは



ところで、日本は昔から「瑞穂みずほの国」とも呼ばれているように、古くから稲作

を中心と暮らしてきま
した。みず
みずしい稲いな
穂ほがたわわ
に実みつてい
る風景が国
の理想とさ
れてきたの
です。現代

でも、その影響が私たちの生活の中
に残っています。

例えば、十一月二十三日の
「勤労感謝の日」がその一つです。

「勤労感謝の日」は、「勤労を尊たつとび、

生産を祝い、国民が互たがいに感謝しあう」

という趣旨しゆいで、昭和二十三年に定められ

た国民の祝日です。それ以前は「新嘗にいなめさい祭」

と呼ばれる祝日でした。

この新嘗祭は、稲作を中心としてきた
日本の大切な行事として現在も行われて
います。国民を代表して祭祀さいしを司つかさどる天皇
陛下へいかが、その年に収穫しゆかくした新穀しんこくや新酒
を、天照大神あまてらすおみかみをはじめ天地の神々かみに供え
て、農作物の恵めぐみに感謝し、みずからも
食するという儀式ぎしです。

このお祭りは、国民にとっても大切な

自然との共生

行事でした。お米の一粒一粒が、太陽と水と土の恵みのおかげであることを知っていた昔の人々は、その年の秋の収穫を喜び、新穀を神前に供え、神々に感謝し

てきたのです。食事のときの「いただきます」という言葉には、神々（自然の恩恵）に感謝する意味が込められています。

このように、日本人は昔から自然を身近に感じ、大切にしてきました。稲作を中心としてきた文化だからこそ、稲作にとって欠かせない水や森林などの自然を大切に守り育ててきたのです。

立正大学教授の富山和子^{とみやまかずこ}さんは『日本の米』（中公新書）の中で、次のように述



べています。

——西欧では、例えばイングランドの山の森林を払って、そこを麦畑にするというのが、土地利用のパターンであった。これに対し日本では、山の緑を払ってそこを穀倉地帯にしたのではなかった。日本人が穀倉地帯にしたのは大河南の



氾濫原であり、そこは海だか陸だか川だか分からないような葦野が原であり、その土地を洪水から守るためにも山へ行って木を植え、水を作るためにもまた、山へ行って木を植えた。(中略)

高度に発達した文明国のなかで日本は、木を植えることで文化を育ててきた唯一の国だったのである——

日本文化の特色は、自然を支配するとか利用するという考えではなく、自然を生かし、自然と共に生きてきた「共生の文化」と言ってもよいでしょう。

しかし今日、私たちは便利さを追求するあまり、自然との「共生の文化」を忘れ、知らず知らずのうちに、先人たちが残してくれた自然や文化を壊してはいないでしょうか。



植林をする漁師さん

田植えを行った由美さんたちは、その後しばらく、自分たちが植えた苗のようすを観察しながら、稲の生長を見守りました。由美さんは、目には見えないけれど、水と土と太陽の恵みによつて稲が日に日に生長していくのがとても不思議でした。

今までは、水田のことなど気にもとめていなかった由美さんですが、自分たちの水田だけでなく、どこに行つても水田や稲の生長に関心を持つようになりました。

夏休みが近づいたころ、由美さんは、

学校の授業で「植林しゆりんをする漁師さん」の話を聞きました。そして、大自然とそこに生きる人間との不思議なつながりについて知り、驚きました。

それは、次のような話です。

*

宮城県気仙沼市けせんぬまで、カキやホタテの養殖業しよくじやうを営む畠山重篤さんはたけやまかげあつ（59歳）は、漁民による植林活動を続けています。漁師の畠山さんが、なぜ植林をするようになったのでしょうか。

三陸地方さんりくの気仙沼湾けせんぬまわんは、リアス式の海岸※で、森が海のすぐ近くまでできています。畠山さんは、この豊かな自然に囲まれて育ちました。地元の水産高校を卒業した畠山さんは、家業の養殖業に従事しました。仕事は順調でした。

※リアス式海岸：陸と海とが複雑に入り組んでいる海岸。山が海のそばまでせまってきているのが特徴。

ところが、昭和三十九年（一九六四年）、急にカキの育ちが悪くなり、白いはずのカキの身が赤くなつてしまいました。原因は、海水が汚れて赤潮（あかしお）ブランクトンが大量に発生したためでした。この状態は、それから五年間も続きました。その間、仲間の多くがカキの養殖をやめていきました。

畠山さんは、苦しい生活の中、海が元のように戻らないか勉強しました。畠山さんの家の近くにはカキの研究所があり、その今井（いまい）丈夫（たけお）博士は世界にほころ研究成果を発表していました。今井博士を慕（した）つて各国から研究者が集まつて来るほどでした。

畠山さんは、そこでフランスから来ていた女性の研究者と知り合いになり、古



い歴史を持つフランスのカキ養殖業を見てみたいと思うようになりました。そして昭和五十九年（一九八四年）、それが現実になりました。



よみがえった自然

畠山さんは、フランス最大の大川、ロワール川の河口で行われているカキの養殖を見学しました。その地方は、畠山さんの住む三陸リアスの海に似ていました。現地をよく調べてみると、ロワール川の流域が広葉樹の大森林地帯であることに気づきました。

ナラやブナなどの広葉樹の森が、野生の動物や鳥を育て、川の生き物をはぐくみ、さらに河口付近の沿岸の生き物をも育てていたのです。日本に帰った畠山さんが注目したのは、気仙沼湾に注ぐ大川でした。その流

域を調査してみると、スギの木が多く、広葉樹が少ないことが分かりました。広葉樹の森は、葉が落ちて腐葉土になり、肥えた土ができます。その養分が大川を通って気仙沼湾に注ぎ、海の生き物を育てるのです。

また畠山さんは、次のようなことにも気づきました。

大川の上流には室根山があり、その八合目には室根神社があります。この神社のお祭りは、大川の河口の漁民が船を出し、室根山が見えるところまで行き、その海水を汲んで神社にささげることから始まります。このお祭りは千二百年の歴史があります。昔の人は、こうした儀式をとおして森と海とのつながりを大切にしていたのではないだろうか、と。

※腐葉土：落ち葉が腐ってきた土。養分が豊富。



こうして畠山さんは、カキの養殖仲間
に広葉樹の植林を呼びかけました。

平成元年（一九八九年）、大川の上流の
室根山に、色とりどりの大漁旗が何百枚

とはためきました。「森は海の恋人」を合
い言葉に、畠山さんたち漁師による森づ
くりの植林が始まったのです。植林に
は、畠山さんの主旨に賛同した森林組合
の人たちも大勢手伝い、ミズギ、ミズナ
ラ、ブナなどの落葉広葉樹が植えられま
した。

まさに、海の民たみと森の民が自然とのつ
ながりを回復させるために立ち上がった
のでした。

その後十二年を経過し、それまでに植
えられた木は五十種、三万本になりました。
やがて、川にはウナギが帰ってきました。
海岸にも小さなエビやタツノオト
シゴなどが増えてきました。もちろん、
カキやホタテの貝の成長もよくなり、も
う赤いカキができることはありません。

気仙沼湾の自然は、少しずつよみがえってきたのです。

(参考) 畠山重篤著『漁師さんの森づくり——森は海の恋人』講談社)

*

畠山さんは、あるインタビューの中で次のように答えています。

「今のように人間の欲望のままに便利な生活を追い求めていけば、結局、沿岸側の海にしわ寄せが来ます。海側にいる漁師には、一番そのことが見えています」

「結局は人間の問題、つまり、人間が何に価値観を持って、どう生きるかということに行き着きます。(中略)どこまでも自然は一体であり、人間をふくめて自然はすべてがつながっていることを知ってもらいたいと思います」と。

ゴミを捨てない



二期が始まると、由美さんたちが植えた稲は立派に生長し、稲穂もふくらみ始めていました。

ところが、水田のすぐ近くを通る道路の周りには、車から投げ捨てられた空き缶やペットボトルなどのゴミが散乱し、水田にも入り込んでいました。風に吹かれて入ったのか、スナック菓子の空き袋や、ビニール袋などもありました。

由美さんは、ホームルームのとき、水田の周りや付近を通る道路のゴミ拾いをしようと提案しました。畠山さんの話を



聞いた由美さんは、汚

れていく自然を前にして、何かをしないでは

いられなかったのです。

幸い、クラスのみん

なも賛成してくれまし

た。そこで、クラス全

員で協力してゴミ拾い

を行いました。ゴミを

拾いながら、由美さん

は思いました。

—— 道路や道端みちばたにゴミを捨てるのは、

以前の自分がそうであったように、「自分

一人ぐらいなら」「だれも見えていないか

ら」という気持ちの人が人の心にあるからで、

その心が、やがて川や森や海を汚してい

くことになる——

そして、大切なのは自分の考え方だと

思い、由美さんは「絶対にゴミのポイ捨

てはしない」と誓ったのでした。

稲刈りの日、田植えのときにお世話に

なつたおじさんが、稲の刈り方を教えて

くれました。稲は一メートルぐらいに育

ち、実つた穂先が重たそうです。

由美さんたちは、軍手ぐんてをして鎌かまを持つ

と田んぼの中へ入りました。教えられた

とおり、一株ずついていねいに刈つていき

ました。最初はうまく刈れませんでした

が、コツをつかむと、ザク、ザクと心地

よい音を立てて刈ることができました。



「自然」にふれて心が育つ

由美さんはときおり腰を伸ばして汗をぬぐいました。空がとても高く、さわやかな気持ちでした。

「今は、田植えも稲刈りも機械でやっているけれど、昔の人は、ずっとこんなふうに手でやってきたんだよ」

そんな説明を聞いて、由美さんは遠い昔の顔も知らない人たちが、何かしら身近に感じたのでした。

*

「ごちそうさま！ おいしかった」

「ところで由美、お茶碗ちawan一杯のご飯は、お米が何粒あると思う？」と和雄さん。

「ええーっ、うーん、わかんない」

「ある小学校で五年生の一クラスが試したところ、平均して二千六百五十粒あったそうだよ」

「へえーっ、お父さん、もの知り！」

じゃあ、お父さん、こういうの知ってる？ 宮城県の漁師さんが、カキの養殖のために木を植えているって話」

「えっ、漁師さんが植林を……」

「そう。昔の人は自然がつながっていることを、よく知っていたんだって」

「あら、田植えの話は聞いたけれど、その話は聞いてないわね」と京子さん。

「それが、とつてもおもしろい話なの。」

でも今日は言わない！」

「えっ、どうして？」

「ねえ、あしたの夕食はカキにしようよ！ そうしたら話してあげるから、お母さん！」

由美さんの目は、田植え体験をしたときのように輝いていました。